人間嫌いな公爵様と離婚手続きをしたら
夫の執着と溺愛が
とんでもないことになりました

リード

国の第二王子。
学生時代からのシャロンの親友。親友の恋を誰よりも応援する。

王太子殿下

リードの兄。
常に笑顔で何を考えているか不明。弟思いで、父である国王の補佐も兼ねる。

リテール・バーン

ジーンの双子の弟。
病弱でめったに表に出てこない。母の実家であるバーン伯爵を継ぐ。

メイド長

離婚する前、ジーン公爵家内でただひとりシャロンの味方だった。

ツォン・ロイヤーティ

バンデージ公爵の執事。
ジーンが唯一信用して重用する。

ジーン

若くしてバンデージ公爵となる。一見冷徹だが、実は執着心が強い。仕事の面は完璧主義で基本的に他人と関わろうとしない。

シャロン

一途で真面目、忍耐力のある人物。気は弱いが、溜め込みすぎると爆発してしまうタイプ。学生時代からジーンに片想いしている。

プロローグ　初夜を断られた結果

王族の第二王子が同性愛者だったことでいろいろあって、同性婚が法律上許されるようになったその年。

まず制度を使った結婚の先駆けとして、人嫌いで有名な若き公爵ジーン・バンデージと男爵家の次男である僕シャロン・トークが選ばれた。

身分差があったのは公爵家にあまり力をつけたくなかった王族が……というのは表の理由だけど、実は僕は第二王子と学生時代、同性愛者仲間として仲良くしていた。そんな僕の好きな人がバンデージ様と知っていた第二王子の計らいによるものだ。

まさか好きな人と夫夫（ふうふ）になれるとは思っていなかったから、それを知った日はなかなか眠れなかったわけだけど、現実はそう甘くもなかった。

わかってはいたんだけど、少しくらい浮かれてもいいと思うんだよね。政略結婚とはいえ、ずっと好きだった人と暮らせるんだから。

「結婚はしたが、正直私は相手が誰でも嫌いだ。娶（めと）るのが男でも変わりないという理由で選ばれた

に過ぎない。王命として公爵家の妻という立場になれたからといって、調子に乗られては困る。礼儀作法の違いなどもあるだろうに、なぜ男爵家から……とは思うが、この際大人しくしていてくれればなんでもいい。初夜だが、男を抱いたところで生産性はないからな、私は仕事に戻る。勝手な真似だけはしないように。要望があれば執事長かメイド長に言え。叶えるかは別だが」

これが簡素な結婚式の後、初夜で夫に一方的に言われた言葉である。

彼があまり人と話すところを見た経験がなかったため、思ったより口が動くんだなと見惚れてしまった僕は割とバカかもしれない。

いや、見惚れていたのは事実だ。

否定されるのは慣れているはずなのに、それでも好きな人から直接言われたのは割と傷ついた。

生産性がないとか同性愛についてまだまだ厳しい目があるとわかっていたはずなのに、やっぱり僕はバカだなあって。

「迷惑はかけないようにします……」

簡素な結婚式でも下がらなかった浮かれた気持ちが、今になって急降下した。

その結果、出た言葉はこれだけ。もともと身分差もある分、迷惑をかけないように努力するつもりではあったから、するっと口に出せた。

「そうしてくれ」

そうして僕は初夜に一人残され、泣かないように耐えながら夜を過ごした。

第一章　公爵様への契約提案

結婚した翌日からはさらなる仕打ちが待っていた。

使用人たちが目に余るほど冷遇してきたのだ。

簡素な結婚式に初夜は放置で、僕がこの家の主人に大事にされてないのは明白。

さらに元は男爵家の次男という低い身分だけでなく、「妻なのに男」という立場がより偏見の目で見られがち。

悪条件が揃いに揃った結果、冷たくされるのは予想できたことだった。

何より公爵様の使用人は家を継げない、嫡子以外の貴族たちの集まりのようなもの。

男女の関係なく、急に運よく公爵夫人になった僕を妬む視線は嫌でもわかった。

しかも公爵様は人嫌いで有名なものの、モテる容姿だからなおさらだ。なんでこんな平凡な男がと屋敷の中でも陰口は絶えなかった。

せめてかっこいい容姿に生まれていれば、多少は違ったかもしれない。

とはいえ、僕は残念ながら冷遇には慣れている。

男爵家でも同性愛者である時点で親からも疎遠にされてきたのだ。だいたいのことは一人でもで

きるのが唯一の救いか。
まあ、次期男爵である兄だけは味方をしてくれたので、家での暮らしはそこまで辛いものでもなかった。結婚が決まった時も、兄だけは心配してくれたのだ。
けれど、いざ公爵家に嫁いでも、味方は一人もいない。それが結構辛かった。
何せ公爵様がいない時は、食事すらまともに用意されない。
「いくら冷遇するにしても、人間に必要な食事まで抜いて嫌がらせするのはやりすぎだよ……」
男爵家でも味や食べやすさはともかく、硬いパンなど与えられていた。
食事は三食とまではいかずとも、二食は最低用意してくれたというのに。
たまに美味しいものを、兄が親の目を盗んでくれることもあった。
その時はその美味しい食事にかなり幸せを感じたものだ。
それくらい食事は大事だというのに……まあ、味方のいないここでそれほどの食事までは望まない。けれど食べられないものや食事を用意しないのは勘弁してほしい。
自分で作ろうとするのも許されないのだからなおさらだ。
公爵様はほぼ家にいないので、毎日お腹が鳴って仕方ない。
執事長、メイド長は紹介もされていないので誰かわからず、聞いたところで知らんぷり。これではさすがに餓死しかねない。
そう思った僕は迷惑をかけないなど言っておられず、使用人たちの視線を無視して食事が済むなり去ろうとする公爵様を捕まえた。
「公爵様、お話があります!!」
「……」
ものすごく面倒そうな顔をされたが、こちらも命がかかっているため必死だ。
僕はなんとか時間を取ってもらい、公爵様にある契約を持ちかけた。
これが後々、公爵様と僕の関係を変えるきっかけになると思いもせずに。

公爵様に持ちかけてなんとかもぎ取った契約とは、『白い結婚が三年間続けば離婚する代わり、どうしても外せない仕事以外、一日のうち、朝昼晩どれでもいいので食事を一緒にする』という単純なものだ。
公爵様からすれば、僕が媚びを売る時間が欲しいと強請ったように思えるかもしれない。だがこちらとしては食事は死活問題だ。
誰とも関わりたくない公爵様にとっては互いに揉めずに済む離婚は魅力的な提案だったようで、渋々といった感じで受け入れ、契約は成立した。
本当は使用人の態度をどうにかしてほしいとか、ほかにやりようはあっただろうけど、証拠も何もない状態でよそから来たばかりの僕が言っても信用がないばかりか、状況が悪化する可能性もあった。

確実に食事が提供される時間を勝ち取れただけ、いい契約だと思う。
何より三年間好きな人と確実に過ごせる時間を得られたのだから、それだけでも幸せだ。
そう、それだけでも十分幸せだったのに、一緒に食事をする時間が増えるうちに公爵様との関係性に変化が起こり始めたのだ。それも僕にとって嬉しい変化が。
「お前はいつも何がそんなに楽しいんだ？」
「え！　楽しそうに見えますか？」
「いつも食事の時、笑っているだろう」
「うーん……と、公爵様と美味しいご飯を食べられるのが嬉しくて、無意識に笑っちゃうのかもです」
「そんなことの何が……」
「公爵様は不快に思うかもしれませんが、僕は公爵様が好きなので、一緒に過ごす食事が単純に嬉しいんです」
「……変なやつだ」
些細（ささい）だが、少しだけ公爵様と会話ができるようになったのだ。
そのおかげで僕は自分の気持ちを伝える機会ができて嬉しかった。
三年後には離婚するのだからせめて後悔のないよう、嘘偽りのない気持ちを伝えたいと思っていたから。

好きな人に何度だって好きと伝えられることは幸せなことだと思う。
たとえそれが片思いだとしても……
伝えるたびに公爵様は理解できないという表情をしていたけど、それをただ聞き入れてくれるだけで僕は満足だ。
周りからすれば、公爵様に媚びを売っているように見えて使用人からの嫌がらせが悪化したとしても、三年という期限と公爵様との些細な時間は僕を無敵のような気分にした。
それに悪い使用人ばかりでもなかったから、そこまで苦しくなかったとも言える。
「公爵夫人の待遇を執事長にお伝えしたいのですが、仕事ができる上、唯一公爵様に信用されている方なのです。それ故お忙しくて、なかなかタイミングが合わず……申し訳ありません」
「大丈夫ですよ！　僕、慣れてるんで！」
「このようなこと慣れるべきでは……!!　私がメイド長としてしっかりできていれば……」
僕の現状に気づいて優しくしてくれたのはメイド長だった。
なんとかしようとしてくれたものの、メイド長は執事長と違って長く勤めただけで公爵様が適当に決めた名ばかりの役職、貴族であるプライドの高い使用人をまとめるのに毎日翻弄されているらしい。
正直、僕以上に大変そうなのに優しすぎるくらいだ。彼女の目の下にはクマができていて、僕のことはいいから少しでも休んでほしい。

まあ、メイド長の様子から執事長は信頼を置ける人なんだろうけど、公爵様の人嫌いの性質もあって、話をする時間が取れず、どうにもならない様子。
僕はそこまで困ってないし、本当に気にしなくてよかったのだけど、それがいけなかったんだろう。
契約期間残り一か月の時に、ついに嫌がらせでは済まない事態となった。
「ここまでしてもわからないなんて、これだから身分の低いバカは！」
「……っ……」
「平凡なその顔でもさすがに傷がつけば悪目立ちする。顔だけは無傷にしてあげるよ！」
まさかの暴力行為である。しかもご丁寧に見えない場所だ。
これを始めたのが使用人ではなく、礼儀作法などを教えてくれるはずの家庭教師なのだから手に負えない。
あれもこれもできないのかとバカにされ続けるだけだったから、油断していたようだ。
何より最近は公爵様と関わる時間が増え、若干僕の浮かれた気分が顔に出ていたのだろう。それが気に食わなかったのかもしれない。
残り期間が一か月だったのは救いだった。さすがに暴力行為まで出てしまえば、いくら公爵様との関係が緩和した今でも一年と持つ気力はなかっただろうから。
緩和したと言っても、たまに一緒にできる食事時間が増えたくらいだしね。

その分会話のできる時間が増えてもいるが、それだけだ。
僕だって人間だ。慣れていても傷つかないわけじゃない。
小さな幸せで誤魔化せるのも、終わりがあるからできること。
「せっかくリードがチャンスをくれたのになあ」
リードとはこの国に同性婚を作るきっかけになった第二王子、僕の親友だ。
身分差こそあれど、その友情に嘘はないと思っている。
だからこそ応援してくれる親友の気持ちに応えたかった。
この三年頑張れた理由はいろいろあるけど、それも一つの大きな理由だ。
でもこの契約期間内に、小さな変化はあれど大きな変化はなかった。
結局どれだけ好きと伝えても同性同士の恋愛や婚姻はうまくいかないのだろう。
公爵様を好きになったことに後悔はしないけど、離婚が成立した日には思いっきり泣こう。
傷つけられた身体（からだ）と心の痛み、どちらが大きいだろうか。
そんなことを考えながら僕は離婚手続きを早めにする決心をした。
これはもういい加減諦めろという、神様からの啓示かもしれないと自分に言い聞かせて。
後は公爵様からサインを貰えば離婚成立というところまで準備を進めた。
まだ三年には少し早いけど、食事の時間に切り出した。

ところが話を出した途端、見たこともない公爵様の姿に、僕は混乱している。
「なぜ離婚の手続きをした？　何か不満でもあるのなら直す。だから離れていかないでくれ」
「え？」
まるでこちらに縋るような目と表情に混乱するなという方が無理だ。
というか、もしかしなくても公爵様は契約を忘れてる？
確かに契約した日からその話を出すことはなかったけど……
とはいえ、食事の時間を一緒に取り続けてくれたから、言わずとも契約を気にしてくれているんだと思っていた。
でも忘れていたとしたら今までなんで……？
「私はお前との時間を悪くない……と思っている。結婚生活に何か不満があるなら改善したいと思うくらいには……」
理由を知って思わず感動してしまう。
最近会話が多くなったと思ってはいたけど、契約に関係なく僕と食事をしてもいいと思われていたなんて……それもそもそもの契約のことを忘れるくらいには。
少しばかり片想いが報われた気がした瞬間だった。
これが今まで耐えてきたご褒美と思えば無駄ではなかった。自分への慰めにもなる。
このチャンスをものにして契約について言わないまま、離婚の撤回も今ならありなんだろう。だけど、それはあまりにも自分が惨めに思えて嫌だ。
公爵様には交わした契約を思い出させてあげよう。
どちらにしても現状が永遠に続けば、さすがに僕が耐えられない。
この離婚が原因で、実家の男爵家から勘当されて平民になってもいい。それくらいの覚悟であの日僕は離婚という契約を持ちかけたのだ。
公爵様とのことは好きな人と過ごした思い出として残せるだけ、僕は幸せだ。
最後に公爵様から嬉しい言葉を貰えたのだからなおさら。
「公爵様、お忘れみたいですが、もう三年経つんですよ。厳密に言えばまだ数週間残ってはいますが……」
「三年……？　あ……」
「僕の我儘を三年間聞いてくれてありがとうございます。忙しい公爵様とほぼ毎日食事できる時間があっただけで、僕は幸せでした。何より好意を聞き入れてくれたことが、まだ同性愛に厳しい世の中では僕にとって嬉しい毎日で……いい思い出になります」
「確かに忘れていた。お前と過ごす毎日が俺にとっても……いや、それよりも本当に離婚するつもりなのか」
「最初に決めた契約ですから」
何度も聞く公爵様が愛しい。

僕との離婚を少しは残念に思ってくれているようだ。
この三年間、知らず知らずのうちに公爵様との関係が改善されていたなら、これからの自分の希望にもなるというものだ。
新しい恋をして、両想いでの同性婚ができるかもしれない、なんて夢見がちかもしれないけれど……
ちなみに食事の場だから、僕の話は使用人たちにも聞こえているだろう。
それを理解した上で話したのは、離婚まで残り数週間くらいは今までで一番マシな生活ができるのでは？　という狙いもあったりする。
新しい恋なんて言いつつも、最後の最後は周りを気にせず公爵様との思い出を噛みしめたい。
まあ、公爵様に改めて時間を取ってもらわない限り、食事の時間内でしか会話できない。でも最後だし、会話も増えた今なら過ごす時間を少しくらい増やしてもらえるかも……なんて期待しちゃっている僕は、やっぱり夢見がちかな……？
「確か契約は白い結婚……そうか、白くなければいいのか」
今までにない黒いオーラをぶつぶつと放ちながら、公爵様が呟いた。
契約を思い出したようだけど、なんとなく不穏な言葉が聞こえたのは気のせい？
「公爵様……？」
「契約の離婚理由がなければ離婚しないのだな？」

「え、契約ではそうですね……？」
「それは契約がなくとも離婚する気は変わらないということか」
なぜか公爵様の機嫌が悪くなっている気がするのは僕だけだろうか？
それにまるで僕と離婚したくないと言外に言われているような、都合のいい解釈をしている自分がいるのだが……相手はあの人嫌いの公爵様なのだから、さすがに夢見すぎ、だよね？
「えっと……さすがに今の生活のままでは、僕が耐えられないというか……」
「どういうことだ？　欲しいものでもあるのか」
「いや、そうではなくて……」
すんなり離婚成立で終わると思っていただけに、僕は言う気がなかったこれまでのことも正直に伝えようと決めた。
今の公爵様なら僕の言うことを信じてくれるかもと思ったからだ。
……これが最後のチャンスかも、と好きな人が僕をどれくらい想ってくれているのか、無意識に試したくなったのかもしれない。
そうして僕が今まで耐えてきたことを告白したために、とんでもない事態を巻き起こすとは思いもしなかった。

公爵視点　初めて抱いた気持ち

こんなにも人のために怒りを抱いたことが、これまでの人生にあっただろうか。
初めて惹かれた相手が、男であろうと、王命が下された自分の妻だという幸運に浮かれていたのかもしれない。
これはそもそも自分で結んだ契約を忘れるほど彼に惹かれておきながら、その相手がどれほど苦しんできたのか知りもしようとしなかった私自身の失態だ。
「ツォン、今すぐメイド長と妻につけていたはずの使用人共を全員連れてこい」
「かしこまりました」
事実を知った私は、私の補佐でもある執事長のツォンに怒りのままに命じた。
そして改めて思い返す。
ずっと私といる時は笑顔を絶やさなかったから、それなりに満足のいく生活をさせてやれているのだと思っていた。
妻が笑っている限り、この心地よい時間がずっと続くのだと信じて疑わなかった。
人と自ら関わろうとしてこなかったせいで、少ない時間の交流で満足していた自分にすら罰を与えたいほど苛立つ。
男だからではなく、嫌ってきた人間に惹かれている事実を認めようとしなかった。
三年間もあったのに、心地のいい空間を作ってくれていた妻との関係はほんの少ししか変わっていなかったのだ。
会うたびに笑って純粋に好意を伝えてくれる……たったそれだけで惹かれる自分の単純さを認めたくなかった、なんてことは今では言い訳にしかならない。
離婚を突きつけられて初めて、手放したくないほどに惹かれていたと気づいた自分が憎たらしい。
何より無駄に悩んでいたせいで妻の現状に気づけなかったことが一番腹が立つ。
『もともと公爵様との時間も欲しかったんですけど、公爵様がいないと食事も用意してもらえなかったので、あの契約にしたんです』
変な契約だと思っていた。
あの時になぜ関わる時間が食事の時だけなのか、質問の一つでもして気づいていれば離婚の引き留めにすぐ応じてもらえただろうか。
『まあ、嫌がらせされるのは予想していたので気にしていないんですけど、最近は暴力も振るわれるので……さすがに我慢し続けるのは辛いなあと』
嫌がらせだけでも許せないのに、暴行を受けていたとまで聞いて私は怒りでおかしくなりそうだった。

証拠とばかりに青痣まで見せられたが、私が離婚について問い詰めなければ話すつもりはなかっただろう。
妻の態度はより一層私を惨めにした。そのことにも妻は気づいていないだろう。
自業自得とはいえ、こんな形でようやく妻に惹かれていたと認めた時点で手遅れだ。
なんとかするからと、みっともなく離婚を考えなおしてもらう懇願がなんと見苦しいことか。
困惑しながらも了承してくれた妻の優しさには感謝しかない。
「公爵様……使用人たちを扉の前に連れてきてはいるのですが、全員から話を聞く前にメイド長からお話があると」
「……なんでもいい。とにかくこの三年間妻に何があったのか、まずは事実確認をする」
「もう遅いとは思いますが、この三年間奥様がされてきたこと全てをお話しします」
そう言って疲れた表情をしたメイド長は覚悟を決めた目つきで話し始めた。
その内容は、私と妻の簡素な結婚式や初夜での対応に基づき、使用人たちが冷遇を始めたこと、妻の爵位の低さと嫉妬、私と食事を一緒に取る機会が増えたことでエスカレートしていった嫌がらせなど、詳細な原因にも及んだ。
私は使用人を責める前に、自分が誠心誠意謝罪すべきだと改めて悟った。
最初から妻を大事にしていればここまでのことにはならなかった。
気づく気づかない以前の問題だ。

正直私が原因なのに、私に好意を伝え続けてくれた妻は天使か女神ではないだろうかと本気で思う。
一度気持ちを認めてしまえばその想いはとどまることを知らない。
会うたびに好意を伝えたくなる妻の気持ちを今頃知るなんて、本当に反省すべきことばかりで自分が嫌になる。
だからこそ決意する。
絶対に私の全てをかけて妻を逃さない、そして傷つけた分必ず幸せにしてやると。
「今後このような失態は絶対にしないし、させない」
これまで妻の気持ちが変わらなかったことを神に感謝しつつ、そう誓ったのだった。

◇　◇　◇

これは夢か？　夢なのか？
今までの経緯を話した昨晩、公爵様に離婚を延期してほしいとイケメン全開で頼まれた。
断れず了承すれば、赤やら青やらなんとも言えない顔色でなぜか感謝された翌日、朝一番に公爵様に土下座をされている。
あの公爵様が土下座なんて正直偽物かと疑いたくなったけど、慌てて上げてもらった顔は本人以

外誰でもなかった。
「あの、公爵様は何も悪くないので謝ってもらうようなことは……」
そうなると現状、とんでもない事態だと混乱しても仕方ないと思う。
何を謝っているのかはともかく、謝罪の姿もイケメンとかズルすぎやしないだろうか？
こんなの、なんでも許してしまいそうで怖い。結局惚れた方が負けなのだ。しかも片想い歴はただでさえ長い。
「いや、今まで辛い思いをさせた原因は私の態度が招いた結果なのだ。思い返せばそれに気づく機会はたくさんあっただろうに、気づいてやれなかった。あげくに契約まで忘れて私は……」
「いやいやいや！　契約を忘れても僕がお願いしたことを破られなかったですし、今まで黙っていたのは僕の判断ですし」
暴力以外は本当に慣れていた。期間が決まっていただけに、公爵様に謝ってもらいたいほど気にしてなかったのは事実だ。離婚さえすれば終わることだし。
正直、なぜ公爵様がここまで僕を気にするのか、その方が慣れなくて困惑するくらいだ。
「今まで言えなかったのは私を信用できなかったからだろう。初めにメイド長にいろいろ伝えるように言いながら、彼女から報告を受ける暇を与えられなかったのもよくなかった」
公爵様はそう言って俯いた。
「執事長ツォンとの時間を取らせなかったのもわざとではないが、家のことを疎かにしていたことは事実だ。正直公爵としての仕事さえして権威を保てれば、家政などある程度はどうでもいいと思っていた。お金の管理など最低限はツォンに任せていたが、それだけだ。人への気配りなどしたことがないからなど言い訳でしかない。本当にすまなかった」
本当に公爵様が謝ることなんてないのに……
こんなに真面目に謝られては、ますます公爵様に惹かれてこの恋を諦めることが難しくなる。
それをわかった上で言っているならズルい人だ。
でも結局、許さない選択なんてないんだけど。
もともと公爵様に対して怒ってもなければ謝ってほしいなんて思ってもいなかった。
「そこまで言うなら謝罪をお受けします、許しますので土下座はもうやめてください」
「ありがとう……なら、離婚はなしにしてくれるだろうか？　君に嫌がらせをしてきた者は全員紹介状もなしの解雇、暴力をした家庭教師と使用人に関しては訴えの準備もできている。しばらくはメイド長に君の傍を任せ、君の命令を最優先に聞くようにも言ってある」
もしかして昨日のうちにしたんだろうか？　でも使用人はかなりの数が関わっていた。
そうなるとそれこそ屋敷の管理が疎かになりそうだけどいいんだろうか？
僕のせいで公爵様に迷惑をかけてしまうのは本望ではないんだけど。
屋敷内では一番仕事をしていただろうメイド長を、僕の傍につかせるのもよくないような……？
「さすがに悪いです。離婚すれば僕のことは気にしなくていいでしょうし、そこまでしなくて

も……」
「離婚したくないからしたんだ。使用人を大量に解雇しようと、そもそも家のことは昔からいる数人の使用人と執事長であるツォンがいれば事足りるんだ。公爵家の威厳などで周りがうるさいから、仕方なく雇っていた者たちがいなくなるだけだからな」
「そ、そうなんですね。でも離婚したくないのはなんで……」
迷惑にならないならいいけど、公爵様の離婚したくない理由に期待してしまう。
昨日も公爵様の離婚したくない様子に同じようなことを思ったし、期待するが故に正直に今までのことを話したのだ。
僕のためにここまでしてくれたなら……期待しても仕方ないよね？
少しくらい夢を見たって……
「……妻を愛しているから以外に、離婚したくない理由はないと思うが」
「え、あ……え？」
確かに期待はした。
期待はしていたけど予想以上の答えに顔が熱くなる。
気のせいか公爵様の頬も赤くなりつつも、こちらをまっすぐ見てくる。
僕は動揺のあまり目が泳いだ。
これ、本当に夢じゃないよね？

だって期待こそしたけど、僕は公爵様みたいに容姿がいいわけでもなんでもない。
信じられない気持ちがあっても仕方ないだろう？
でも公爵様は冗談を言うような方じゃない。
それもわかっているから、余計に現実味がないというか……
「夫として頼りない部分しか見せていないが、まだ完全に幻滅されていないならチャンスがほしい。君を妻として幸せにするチャンスを」
「げ、幻滅なんてするはず……！」
「ならば、一旦離婚はなしということでいいな？」
「え、あ、そうです、ね……？」
あれ？　離婚は延長って話じゃ……？
なんかうまくはめられた気がするのは気のせいだろうか？
「ありがとう、シャロン。愛している」
「ふぇ」
困惑してる間に急に抱きしめられ、名前を呼ばれて愛を囁かれた。
僕はいろいろ限界突破して、公爵様の腕の中で気絶したのだった。
目が覚めてからも、一度愛を伝えてきた公爵様の態度の急変は元に戻らなかった。

「私は何を迷っていたのか、過去の自分を殴りたいくらいだ。こんなに可愛い妻を愛でずにいられたなんて」
「あうあうあうあう」
この人誰ですか？　というくらいに甘い雰囲気が僕の心を攻撃してくる。
抱きしめられながら頭を撫でられ、愛を囁かれ……
何が公爵様をそうさせたのか本当にわからない。
可愛いなんて平凡顔の僕には似合わない言葉だと言いたいのに、公爵様との触れ合いに慣れていないために口に出た言葉が言葉にならない。
こんな触れ合いは家族で唯一優しかった兄くらいしか経験がないから、慣れるはずもない。その兄ですらこんな長時間抱きしめることもなかった。
正直気絶しないだけで精一杯である。
「ああ、そうだ。この痣の手当ては私がするから他の者にさせないように」
「そそそんな……さすがに申し訳が」
「シャロンを誰にも触れさせたくないんだ。今回は寝ている間に手当てはしたが、手当ての最中ぴくぴくと動く可愛い姿を、私以外に見せると思うと医師ですら許せない」
公爵様の言う通り、寝ているというか、僕が気絶している間に公爵様自ら手当てしてくれたようだ。

起きた時にはもう抱きしめられた状態で、公爵様の胸にもたれていた。
混乱した僕はまだお礼一つ言えていないのが現状だ。
とんでもない発言の爆弾を落とされて、実は僕、死んで天国にいる説が出てきた。
だって、人嫌いの公爵様はどこに行ってしまったのか。
甘い言葉を吐く公爵様は僕の中の妄想だけと思っていたのに！
「あの、それなら自分で……」
「……」
「ひゃぅ……っこ、こうしゃ……」
さすがにずっと公爵様に手当てされるのは精神がもたない。
自分で手当てをすると提案しようとすれば、なぜか無言で公爵様に服の上から乳首を摘まれた。くりくりと弄られ、思わずあられもない声が出そうになり、手で抵抗しようとするも公爵様の力に敵うはずもなかった。せめてと自分の口を塞ぐ。
「どうやら私の妻は敏感らしい。なのに自分で手当てができるのか？」
「や……っそんな、とこ……怪我してな……ふんぅ」
でも塞ぐ手の力も抜けて意味をなさない。
意地悪な公爵様にきゅんきゅんしちゃってる僕もいるけど、喘いじゃう自分が恥ずかしくて仕方ない。

自分がこんな敏感だったなんて知りもしなかった。
好きな人に弄られているせいだとしても、あまりに敏感すぎて同じ男なのに幻滅されないか、途端に不安になる。
「シャロン？　な、泣いているのか？　すまない、可愛くてつい調子に乗った」
「ぁ……ごめ、なさ」
気がつけば泣いてしまっていたようだ。
先に気づいた公爵様がぱっと乳首部分から手を離してくれたので、謝りながらもとっさに公爵様から距離をとる。
「泣かせるつもりはなかったんだ。今までが今までだったのに、性急すぎたな」
「……っ……僕、気持ち悪くなかったですか」
「何を……！　むしろ可愛すぎて襲いたかったくらいだ！　あ、いや、これは怖がらせたいわけではなく……だが、嘘というわけでも……」
勢い余ったとばかりに言い切る公爵様に少しホッとした。
公爵様に好意を持ってもらえただけでも嬉しいのに、性欲という点ではやっぱり男だからとそれがなくなる可能性は大いにあると思っていたからだ。
男同士の恋愛はそれほどに難しいものだと理解しているからこそ、僕は公爵様の急な変わりように慣れないし、慣れることが怖いとも思ってしまう。

今、公爵様から離れて冷静になってから気がついた。
このまま流されても今は幸せかもしれないけど、いつ公爵様の気持ちが変わって関係が崩れるかわからない。
そうなれば、僕は使用人にされてきた行為よりも耐えられない。
同じことをされても、何も思ってない人とそうじゃない人からの行為では感情の揺れ幅が全然違うのだから。
「公爵様、僕は男です」
「？　ああ、それは知っているが……」
「公爵様に好意を持ってもらえて嬉しいのですが、だからといって僕を抱くとかそういう行為は無理しないで大丈夫です。初夜の時、公爵様も言っていたでしょう？　男だから生産性がないし、しても意味がないって……」
十分夢を見させてもらったから、これ以上望んではいけないと自分に言い聞かせる。
初夜を迎えた際に公爵様が言ったことに嘘はない。
だからそれを言えば公爵様もきっとこれ以上はしないだろうし、なければ現状を維持できて僕としては十分だ。
「そ、れは……」
公爵様がはっとして後悔するように青ざめたけど、きっとそれは僕の夢見すぎる妄想がそう見せ

ているだけだ。
だから僕は言葉を続ける。
「僕も公爵様が好きですけど、もともと噂の『人嫌い』も承知の上で嫁ぎました。そこまでの期待はしていませんでしたし、暴力を受けず、使用人がいなくなることで公爵様に迷惑がかからないなら、離婚しなくても今のままで十分ですよ」
そう、それで十分だ。
離婚せず、生活が改善されるならそれ以上にいいことはない。
好きな人と一緒に過ごせる日々が幸せなのは、この三年間身に染みているから。
「あの時……私は知らず知らずのうちに君を傷つけていたのか」
「そんなことないですよ！　慣れていましたから」
そう『傷つくことには』慣れている。
だからそんな悲しそうな顔をしないでほしい。
これ以上に期待してしまいそうな自分が出てくるから。
「シャロン……私は」
なんとなく期待してしまいそうになる自分から逃げたくて公爵様から目を逸らせた。
公爵様が何かを言いかける。
しかし、それは扉のノックの音によって遮られた。

「奥様、お休みのところ申し訳ありません。こちらにジーン公爵閣下はおられますか？」
聞こえてきたのははあまり聞き慣れない声だった。
「ツォンか。いるが、今は……」
名前を聞いて、その声がこの三年間、公爵様以上に関わりを持てなかった執事長であると理解する。こう言ってはなんだが、公爵様とのなんとも言えない時間を遮ってもらえて、思わず感謝を述べたくなるタイミングだった。
「それが至急、お伝えが必要なことでして」
公爵様が断りを入れようとしたのを察してか、その用事が緊急性のあるものだと伝えられる。
そのせいか公爵様はさすがに後回しにできないと判断したのか、僕を気まずそうに見て扉に向かった。
「わかった。話は聞くが、私の部屋に移る。シャロンはまだ休みが必要だろうからな。シャロン、話はまた後で……」
「いえ、奥様へのお気遣いはよろしいのですが、奥様にも関係があることでして」
そうして僕を気遣った言葉とともに開かれる扉。
だが、公爵様の気遣いをよそに、それを聞いた執事長が申し訳なさそうな声と表情で僕にも関係あることだと伝えた。
思わず首を傾げる。

公爵家関連で、僕への用事など今までなかったので疑問が湧いた。
公爵様も怪訝な表情になっている。
「実は王城からお二人宛に手紙が届いていまして、一通はお二人に宛てた国王陛下から、もう一通は奥様個人宛に第二王子殿下からもお手紙が来ております」
「陛下はともかく第二王子？」
「リード……殿下から手紙が⁉」
思わず敬称を忘れかけつつも、僕は親友からの手紙と聞いて声を上げずにはいられなかった。
この三年間、結婚後いくら手紙を送っても返事がもらえなかった。
てっきり在学時とは違ってもともとの身分のせいで届かないのかと、連絡を取るのを諦めかけていたから。
「……親しいのか？　名前呼びが許されるほどに」
「唯一の親友なんです。この三年間手紙の返事がなかったので、向こうは今どう思っているかわかりませんけど」
「そうか、親友か」
なんとなくほっとした様子の公爵様を不思議に思いつつ、執事長に駆け寄って手紙を受け取ろうとする。
突然、執事長が頭を下げた。

「奥様、大変申し訳ありません。王城からの手紙についてなんですが、どうやら今回解雇される使用人貴族たちによって処分されていたようです。これまで気づかず、申し訳ありません」
「え……」
まさかそんなことまでされていたなんて。
随分悪質だなと思う。そりゃ手紙の返事が来ないのも仕方がない。
でもそうなるとリードが手紙すら送らない薄情者と僕のことを思ってないか不安になった。この手紙も絶交するとかだとすれば、さすがに泣きそうだ。
「昨日はそんなこと一言も聞いていなかったが」
どうやら公爵様も今知ったようだ。
それなら執事長がそれを知ったのは何でなんだろう？
「公爵様宛は私が最初に預かることを知ってか、恐れ多くも第二王子殿下より私宛にも手紙をいただきまして、王城の使者より私が先に読むように言われ、拝読しました。そこに手紙について書かれていまして……第二王子殿下はご自身が送っていた手紙が奥様に届いていたのか疑問に思われていたようです。まさかとは思ったのですが、手紙を届ける前に確認してまいりました」
ん？　それってもしかして……
「あの、もしかして処分していたのは、リード殿下からの手紙だけじゃないということですか？　それに今回のことをリード殿下はお知りに……？」

「その通りです。奥様の手紙も含め、まさか王城からの手紙まで勝手に処分するような者がいたとは思いもせず……。また、今回のことは大量の貴族使用人の解雇のため、周りの貴族が騒がしくする可能性を考え、あらかじめ国王陛下に事情をお伝えしておりますのでそれでお知りになったのかと」

「身分を気にするくせにとんでもないことをしでかしたものだ。第二王子のこともあって随分お怒りなのか、陛下から私とシャロン、あとシャロンに暴行したもの、手紙を処分した者たちを急ぎ連れてくるように書いてあるな」

いつの間にか手紙を受け取り読んでいる公爵様。

僕のことでここまでの事態になるとは思いもしなかった。

でもリードに今回の件がバレているなら想定以上に大事(おおごと)になりそうだ。

リードは怒ると手をつけられないところがあるから……

「あの、使用人たちはすぐ連れていく準備ができるんでしょうか？」

「まだ処分を下してないからな。公爵家の地下の牢屋に男女別で入れている。さすがに人数が人数だから牢屋が足りなかったが、なんとかまとめて放り込んだ。一応現時点で判明した罪での処分準備はあるが……何せ人数が多いのでな、さらなる余罪もないか、細部まで確認して改めてその処分でいいか決定する予定だった」

なるほど、まだ公爵家にとどまっていたから執事長も手紙についてすぐ確認できたのか。

でもそうなると、本当にすぐにでも出発できそうな雰囲気である。

リードの怒りを、時間を稼いである程度落ち着かせる作戦は無理そうだ。

「罪人についてはこちらで手配いたします。とりあえず、奥様も第二王子殿下からのお手紙を読まれますか？　もし手紙内容に、他に指示があれば言っていただきたく存じますので」

「あ、はい」

親友からの手紙に、嬉しさや不安などいろいろ読むまでに思ったものだけど、今は正直嫌な予感をひしひしと感じている。

これでリードの怒り具合がわかりそうではあるんだけど……

恐る恐る手紙を開くとすごく可愛らしい文字で怖い内容が書かれていた。

「あ、めっちゃ怒ってる」

思わずそう声に出てしまうくらいに怒ってると思うリードからの手紙の内容には……

《ぼくのだーいすきな親友シャロンへ

この三年間文通ができないくらい幸せなのかと思っていたんだけど、そうじゃなかったみたいだね！

親友より旦那を優先する気持ちもわからなくはないし、ようやく叶った恋の相手との結婚だから、恋を育むのにも忙しいのかなとずううううっと手紙の返事がなくても密(ひそ)かに応援してたんだ……

なのに今回の話を聞いて、ぼくはとても後悔してるよ。
男爵家以上に辛い日々をぼくのせいで送らせてしまったみたいだ。結婚した親友のプライベートを調べるのはよくないからと我慢したのがいけなかったね。手紙の返事が一通もない時点で乗り込めばよかったよ。
シャロンならあの公爵も落とせると思って背中を押したつもりだけど、今回ばかりはぼくの勘違いだったようだね。もちろんシャロンに魅力がないとかじゃなくて、公爵に見る目がないって意味でね！
今回父上に頼んで罪人の一部も呼んでもらったから、公爵含めてぼくがシャロンを苦しめてきたこの三年間を後悔させるぐらいに、精神も身体もぼっこぼこにしてあげるからもう安心していいよ！
離婚もして新しい恋ができるまで王城で暮らそう！　もう父上には話してあるから気にする必要はないよ！　男爵家に戻りたくはないだろうし、これからはぼくが傍で守ってシャロンを幸せにできる結婚相手を見つけてあげるからね！
君が一途なのはよおおおおくわかってるけど、ぼくはシャロンが幸せになれないなら鬼にだってなるから！
とりあえずシャロンを殴ったやつはぶっころす》

だいたいこのようなことが書かれていた。
一部言葉にできない長文もあったけど要約すればこんな感じだ。
なんとなく分厚いなとは思っていたけど、十枚くらいあった手紙に公爵様と執事長は目を丸くしていた。
まあ、僕も驚きはしたけど、どちらにしてもさすがにこれは内容を伝えにくい。
リードの怒りの矛先は公爵様にもあるようだ。
「えー……とりあえず、要望は国王陛下の手紙にある分だけでいいようです。リード殿下は、ただ僕のために怒ってくれているようで……」
「怒りの度合いがその枚数から窺えるな……」
「随分仲がよろしかったのですね……」
「あはは……」
とりあえず笑うしかない。リードはとても友達想いなのだ。
でも、学園で一緒に過ごしていた時は警戒心が強くて、僕以外に仲良くしていた人をあまり見たことがない。
僕と仲良くできたのは、趣味が似ていて好きになる人が男性という共通点があったからだろう。
そんなリードだけど、男性が恋愛対象なだけで結婚予定はないのに同性婚を法律上認めさせたのはすごいと思う。

まあリードの好きな人は男性という性別以外にも問題があるから、先駆けとして僕と公爵様が選ばれたんだけど。
ま、まあその話は追々……
「もともとこの結婚は王命。その手紙の量が怒り具合として見ると今回の件で離婚……なんてことも考えられそうだ。第二王子は陛下に随分可愛がられているからな。だが、さすがにそれは考えすぎか……？」
リードの手紙の量に思うことがあったのか、公爵様の割と鋭い指摘に思わず動揺する。
一瞬だったが、それを公爵様は見過ごしはしなかった。
「まさか……当たっているのか」
「そ、その離婚後、王城に暮らして結婚相手を探そうといった内容はありました」
誤魔化せそうにもなく正直に言えば、公爵様の顔色は真っ青になっていく。
本当に離婚はしたくない様子が窺えて少しにやつきそうになるがなんとか耐える。
これくらいで喜ぶ僕はかなり単純だ。
正直、今の公爵様相手なら僕も離婚は考え直すところがあるので、いくらリード相手でも離婚は取り下げてもらうようお願いするつもりである。
もちろん不安がないと言えば嘘になるけど、公爵様の好意に応えたい。
「今回の件、言い訳の余地もないが、離婚だけは避けたい。今の私はシャロンが他の相手と結婚すると考えるだけで、見てもない相手を殺してしまいそうだ」
「そそそうですか」
気持ちに嘘はないけど、真剣な眼差しをして急に殺しにかかるような言葉は本当に勘弁してほしいと思う。僕の心臓がもたない。
「初々しいですね。離婚の回避を第一に、その確率を上げるため、できるだけ王城に急ぎましょうか。あまり遅れては余計機嫌を損ねる可能性もありますから。では、私は罪人の準備をして参ります」
「ああ、頼む」
「うう」
なんだか執事長の温かい視線に縮こまりながらも、僕たちはこうして王城に向かうこととなった。
「あっはっはーっ！　ようやく来たね！　シャロン以外の罪人どもおおお！」
「リード……頼むから席を返してほしいなあなんて……」
「はあ？　陛下なんか言いましたあ？」
「あ、なんでもないです」
「「……」」
王城に来た僕たちが謁見の場に案内されて最初に見たものは、玉座に座りどこぞの悪役のように

高笑いする第二王子のリード。
そしてその玉座の左床下付近で正座する国王陛下と、王座の右横に立ってにこにこ微笑む王太子殿下の姿というとんでもない絵面だった。
これには僕だけでなく、公爵様や連れてこられた使用人たちも頭を下げるのも忘れてぽかんとした。
僕の親友は学園でも割といろいろしでかす人だったけど、これはさすがにやりすぎではないだろうか。
何より僕以外を罪人扱いは言いすぎだ。
それじゃあ公爵様も含んでいることになってしまう。
いや、それより第二王子という身分は確かに偉いと思うけど、国王陛下と王太子をよそに王座に座るリードをなぜ誰も止めないのか状況がわからなさすぎる。
周りには信用のおける騎士たちだけなのか、数人いるものの誰もが目を背けている。
国王陛下に仕えるだろう騎士までいて、この国大丈夫なの……？　なんて心配になってしまう。
それにこの状況でにこにこ微笑んでいる王太子殿下が不気味に見えるのは僕だけ？
「あ、シャロン、せっかく来てくれたのに立たせたままでごめんね！　椅子用意するからちょっと待ってね！」
「え」

ぽかんとしている間にとんでもない提案をされた。
国王陛下が正座、王太子も立っていらっしゃるというのに、この状況で僕に座れと言うのか、リードは。しかも謁見の場で？
「私は立位に慣れているから私の椅子を使うといいよ」
王太子殿下が気軽に話しかけられる。
「あ、いえ、僕も立ってますので！」
しかも王太子殿下の椅子に座れと……？　王太子殿下もなぜ止めないんですか……！
「今回の主役はシャロンだから遠慮しなくて大丈夫だよ！」
「いや、だから……」
「遠慮しなくて大丈夫だよ！」
「いや……」
「遠慮しなくても大丈夫だよ！」
何度も言わないで！　遠慮とかそういう話じゃない！　しかも主役とは？
しかし、悲しいかな……圧がすごすぎて断るのは無理だと悟った。
僕はなぜか挨拶する暇もなく、玉座の隣に用意された王太子殿下の椅子に座った。
なんで僕は、今一緒に来たはずの公爵様を見下ろす形になっているんだろう……？
そして親友のリードが本当に何を考えているのか不明すぎる。一つわかるのはこういう訳のわか

らない行為を取るのは、リードが怒っている証拠だということ。
もう成人はしてるのに学園時代と変わってない様子がリードらしいっちゃらしいけど、それを許している様子の王太子殿下と国王陛下も割とやばいと思う。
国王陛下に関しては許すというより逆らえないみたいな感じではあるけど……この国の王様がそれでいいのだろうか。
こう……国王としての威厳とかあってもいいと思うんだけど、床に正座しちゃっているからなあ……
「……挨拶が遅れてしまい、申し訳ありません。バンデージ公爵当主としてこのたびは申し出の通り罪人を連れて参りました」
まだこの雰囲気に内心落ち着かない僕と違い、公爵様はなんとか気持ちを持ち直したようで、ようやく話が進みそう。異常な空間で誰よりも早く持ち直す様子はさすが公爵家を支えてきた当主様といった感じだ。
「うんうん、すぐ来たことは褒めてあげるよ。顔も上げていいよ、発言も許可する」
そんな公爵様相手に、リードは何やらにっこりと微笑みながらすごく上から目線の褒め方をする。正直褒める気があるのかといった喧嘩を売るような言い方だ。
同時に、本来なら国王陛下が許可するべきことをリードが許可をしたためか、公爵様は少し迷いを見せたものの、言われた通りに顔を上げた。

「ありがとうございます。今回のことについては私としても不甲斐なく、深く反省をしております」
「そっかそっか、反省は大事だねえ」
そんな公爵様を見つつも、リードは笑みを絶やさず、公爵様の言葉を受け止める気のない様子で返事を返す。
口は笑ってはいるものの目が笑ってないのは公爵様も気づいているだろう。
しかし、一度気持ちを持ち直した公爵様を見る限り、顔色が変わる様子はない。
逆に公爵様の後ろに腕ごと縛られながら立ち尽くす使用人たちと家庭教師だった人の顔色はどんどん悪くなっていく。
リードって顔が可愛いんだけど、怒ると圧があって怖いから気持ちはわかる。
それに真摯に向かい合う公爵様はさすがというべきだろうか。
僕と執事長の前では割とわかりやすく顔色を変えていたように思うけど、やっぱりあれは、僕の願望による幻覚だったのかもしれない。
そう思うくらいには公爵様の真剣な表情は崩れない。
「……妻から第二王子殿下より離婚を勧める話を伺っております。謝罪はいくらでもいたします。これからはこのようなことがないようにいたしますので、どうかチャンスを頂けないでしょうか」
「へえ、ぼくから言うつもりだったけど、手紙の内容はシャロンが伝えたんだ」
「ご、ごめん……誤魔化しとか苦手で……。でも伝えたのは一部だけで……」

「んーん、シャロンを責めるつもりはないよ～！　別に知られてもどうせ言うつもりだったからよかったしね！　シャロンが嘘下手なのはよーく知ってるから」
圧が引かない感じから怒っている状態は変わらないけど、僕には学園の時のように優しいリードでなんとなくほっとする。
三年経ってもリードはリードで変わってないんだな。
まあ、こう怒るとめちゃくちゃな部分は変わってほしかった気もするけれど。
あーでも、ある意味悪化という意味では変わっていると言えるかな……？
こういうところは学生のうちだけと思っていたけど、国王陛下がこれじゃあ一生この部分は直らないかもしれない。
怒ると周りを巻き込みとんでもないことをしでかす性格は……
「で、話を戻すけど、バンデージ公爵に聞きたいことがあるんだよねえ」
僕への確認が終わったリードは、再び意識を公爵様に戻した。
話を戻すと言いながら質問するとは、あまりいい予感がしない。
まあ現時点でいい予感のする人はいないと思うけれど。
「私が答えられることでしたらなんなりと」
なんとなく誰もが緊張した様子でリードの質問内容を待つ。
現在リードが話しているのは公爵様だというのに、この緊張感はなんなのだろう？

「バンデージ公爵が結婚してから何年経ったかな？　もちろん答えられるよねえ？」
「……約三年となります」
「うんうん、だいせいかーい！　……そう、三年も経ってるんだよね」
質問内容は簡単なものだった。
その正解の答えにリードがはしゃいだ様子を見せたかと思うと、次の瞬間、リードは笑うのをやめた。もともと笑っていない目と表情がようやく一致した。
思わずごくりと唾を呑み込んだのは僕だけではなさそうだ。
さすがの公爵様もリードの雰囲気の変わりように緊張した様子を見せる。
王族としての威厳を見せられているようで、すでに空気は先ほどまでとは全然違っていた。
「チャンスって言うのは簡単だよね。でもバンデージ公爵には三年間その期間があってその結果が今出ていると理解していないの？　シャロンと離婚しなかったとして、バンデージ公爵の言うチャンスが何なのか、ぼくには理解できないんだよね」
「それは……」
「そのチャンスのために、またシャロンが似たようなことで傷つくはめになったらどうするの？　三年間今回の件に気づかなかったバンデージ公爵をどう信じろと？　仕事に関しては信用しているけど、シャロンについては何一つ信頼できる点がない。それをわかった上で言ってるならいい加減にしなよ？　ぼくはシャロンみたいに優しくはないからさ」

僕は簡単に考えすぎていたようだ。
思っていた以上にリードは僕を大切に想って、本気で怒ってくれている。
手紙にあった鬼になるというのはこういうことだろう。
離婚しないのは本当に僕にとって正解なのか、今のリードを見ていると揺らいでしまった。
公爵様への気持ちがなくなったわけではない。
ただ、その気持ちだけでこれから公爵様を信じて何があっても立ち向かえるかと言われたら……わからなくなった。
だって人の心は簡単に変わることを僕は知っているから。
冷静であろうとしながらも、僕はほんの少しの幸せを味わったせいで、やっぱり期待に胸を膨らませすぎたのだろうか。
ここに来るまでに思っていたことがリードの言葉で間違っていたんじゃ……と覆される時点で僕は結局……
「おっしゃる通りです。その件に関しては言い訳すらありません。それに私はこうなるまで自分の気持ちを自覚しきれなかった大馬鹿者でもあります。しかし、自覚した今、なんとしてでも妻であるシャロンを手放したくないのです。これは私の我儘でしかないでしょう……でも今は、ただ我儘を言う以外、私にはできることがないと理解した上で申し上げます。離婚はしたくありませんし、シャロンを幸せにしたいですし、この上なく愛でたいと」

僕の揺らぐ気持ちと違って、公爵様はリードの圧にも負けずそう言い切った。
言い訳一つせず、自分の気持ちをまっすぐに。
その真剣な物言いに思わず見惚れる自分がいる。これが惚れた弱み……だろうか。
親友のリードが僕のために鬼になってくれているというのに。簡単に見惚れてしまう自分に罪悪感で少し胸が痛む。
「馬鹿は馬鹿でも見る目はあったようでよかったよ。でも我儘なんて許すわけないよね。それを許せばここにいる罪人を許すようなもんでしょう？」
「リード！　……殿下……っ、それとこれとでは」
「シャロン、君はぼくの親友だから許すけど、本来なら発言を許可するまで話してはいけないことはわかるよね？」
「……はい」
あまりの言いように思わず声を上げればリードに咎められる。
言いたいことはあれど、彼の発言はもっともだ。
リードは貴族も敬う王族なのだから、不敬罪にされないだけ優しい対応だろう。
これ以上は公爵様にも余計な迷惑をかけると判断して僕は黙りこくるしかない。
「まあ、そういうわけでぼくからチャンスをあげる気はないよ。離婚は決定事項だからね。でも、ぼくは協力する気ないけど、再婚するなとは言わないよ。まあ？　再婚にも王からの許可いるけど

ねえ？」
「……シャロンを他の者に渡す気はありませんので、必ず認めていただく努力をするつもりです」
「それまでにシャロンの気持ちが離れないといいねえ？　当たり前だけど、離婚成立後は公爵家にいさせる気はないから。すでに王城に部屋は用意させてあるし、これを特別待遇だ、なんだと言う馬鹿がいても、バンデージ公爵みたいなヘマはしないから、安心するといいよ」
「それは安心ですが、やはり妻のいない生活はもう無理な身体となりましたので、毎日でも王城に通わせていただきますね」
バチバチと火花を散らす二人の睨み合いに、謁見の場は今日一番の緊張感に包まれる。
にしても離婚は決定……でも再婚は可能だから、これからどうなるのか予想もつかない。
公爵様は僕と再婚する気でいてくれるみたい。
僕としては嬉しいけど、離婚後簡単に会えるかもわからない状況で、その気持ちがいつまで続くんだろう……
そうやって公爵様が好きという気持ちだけで信じきれない時点で、僕と公爵様との間には当然だけど夫夫としての絆ができ上がってないと改めて実感する。
ある意味、この離婚は互いを見つめ直すのにいいきっかけかもしれない。
「バンデージ公爵がそこまで甲斐甲斐しくできるとは思えないけど、やれるもんならどうぞ？　さて、まだ言い足りないけど、バンデージ公爵にはこれからも話す時間はいくらでもあるから、これ

立ち読みサンプル
はここまで

くらいにしてあげる」
まだまだこの二人の対話が続くのかと思ったけど、今回に限ってはここで区切りとなるみたいだ。
リードの視線は公爵様から家庭教師だった人と使用人たちに向けられた。
今回謁見する事態になった一番の原因だ。
さっきまでのリードと公爵様の様子を見ていたからか、来る前以上に彼らの顔色は悪い。
まあ、リードだけでなく公爵様も睨んでいるから、もし同じ立場なら血の気が引くのも頷ける。
もちろん、そうなるつもりはないけれど。
「次はお前たちの番だよ。身分と生まれの運がよかっただけの、うるさいハイエナの分際で、ぼくの親友に暴行なんてよくできたものだよ。普通に訴えてシャロンへ多額の慰謝料を支払わせたあげく、王族からの信頼をなくした貴族として立場を悪くするか、平民にするなんてバンデージ公爵は考えているみたいだけど、死刑でもいいよね。生きてる価値ないし？」
リードは怖いことを冷たい目をしてさらりと言った。
「奴隷制度があった時代なら簡単に死なせず奴隷として身分を堕としてもよかったんだけど、今は人権があるからお前たちのような罪人でも奴隷は許されない時代なんだよねえ。生き地獄を見ずに簡単に死ねる刑があるなんて、いい時代に生まれて本当運がいいよ」
許すつもりは少しもないとばかりに、言いたい放題だ。
今の発言を聞くと公爵様相手にはまだ温情があった方なんだと思う。